

欠損駆動思考 — 概要版

棄却される誤差を、問い合わせて拾う

2026年02月13日

目次

1	待つ、ということ	2
1.1	違和感を捨てないでください	2
1.2	すぐに解こうとすると、問題を小さく切り詰めてしまう	2
1.3	体が感じていることに耳を傾ける	3
1.4	待つには支えが要る	3
1.5	あなたの「欠け」は何ですか	3

title: “待つ、ということ” audience: “general” lang: “ja” generated: “2026-02-09T00:00:00+09:00” reader_rules_version: “reader-rules-general v1.0” base_commit: “6c837a1” status: “auto-generated draft (手で編集しないこと)” —

1 待つ、ということ

何かがうまくいかなかつたとき、もやもやした違和感が残ることがあります。

その違和感を、あなたはどうしていますか？

多くの場合、私たちはすぐに原因を探して、対処して、次に進もうとします。それが正しいときもあります。でも、すぐに片づけたことで、何かを見落としていたかもしれませんと、ふと感じることはありますか。

これは一人の探究者が、自分の中の違和感を観察し続けて見えてきたことの記録です。正しいかどうかはわかりません。ただ、もし何かが引っかかるなら、少し付き合ってみてください。

1.1 違和感を捨てないでください

予想と現実のあいだにはズレがあります。そのズレの多くは、脳が自動的に処理して流してしまいます。

でも、ときどき流しきれないものがある。「何かが欠けている」と感じる瞬間。それを、私は「欠損」と呼んでいます。

欠損は故障ではありません。「欠け」として感じた経験そのものが、創造のきっかけになることがあるように思います。

うまくいかなかつたことを、考えるきっかけにする。棄てられるはずだったズレを、問い合わせて拾い直す。それが欠損駆動思考の核心です。

1.2 すぐに解こうとすると、問題を小さく切り詰めてしまう

違和感に気づいたとき、私たちはすぐに「解決」したくなります。

でも、すぐに解こうとすると、問題を自分が解けるサイズに切り詰めてしまうことがあります。本当は大きな問い合わせたものが、小さな対処になってしまいます。

「待つ」ことが、反射的な処理と創造的な処理を分けるのかもしれません。

すぐに解決しないことが、美しいものや新しいものが生まれる条件なのかもしれない。答えをすぐに出さないほうがいいときがある——そういう感覚を、あなたも持っているのではないですか。

1.3 体が感じていることに耳を傾ける

違和感を感じるとき、私たちは2つの信号で評価しているように思います。

「これは危ないか？」——恐れの信号。「これは関係性に関わるか？」——愛の信号。

同じ出来事でも、恐れが強いときは脅威に見え、愛が強いときは興味に見える。体の中で、この2つの信号がいつも走っています。

体で感じないと、本当にはわからない。頭だけの理解と、体が「そうだ」と感じる理解は、質が違うように思います。

段階	名前	簡潔な説明
1	場	違和感のある環境に身を置く
2	波	内面に揺らぎが生まれる
3	縁	異質なものと出会い、留まる
4	渦	新しいパターンが生まれる
5	束	形にまとめる

3段階目の「縁」に留まることが難しい。でも大切なのかもしれません。

1.4 待つには支えが要る

待つことは、一人ではとても難しいことです。

心の中に信頼できる誰かがいること——それが「待てる力」を育てるように思います。物理的にいなくとも大丈夫です。亡くなった人でも、過去の恩師の記憶でも。心の中にいる人が、支えてくれます。

安定した関係が、待てる力を育てる。ただし、ひとりでは待てない。心の中に、誰かがいれば。

1.5 あなたの「欠け」は何ですか

ここまで書いてきたのは、すべて一人の探究者の観測です。合っている保証はどこにもありません。

まだわからないことのほうが多い。「恐れ」と「愛」の信号は本当に2つなのか。組織で「待つ」をどう支えるのか。どれも探索中です。

もし何かひとつだけ持ち帰れるものがあるとしたら——次に違和感を覚えたとき、すぐに流さず、少しだけ持ち続けてみてください。

その違和感の中に、何が隠れていますか。

これは一人の探究者の現在地です。仮説の塊であり、読み物です。